

75回生へ(5) 第2回大学入学共通テスト 2022年1月15日(土)16日(日)

2年5組担任

1. <概況>2022年度第2回大学入学共通テストはオミクロン株の急拡大を受け、各地の試験会場では厳重な感染防止策を施して行われた。共通テストには864大学が参加し、前年度比4,878人減の53万367人が志願。2022年3月高等学校等卒業見込者(現役生)の志願者は、志願者全体の84.7%にあたる44万9,369人で、志願率(現役志願率)は過去最高の45.1%となっている。

2. <平均点>国語と数学I・A、数学II・B、英語の「基幹3教科」平均点合計は、600点満点中318.78点。前年と比べて31.30点ダウンした。<1月19日発表 大学入試センター中間集計>

大学入試センター試験は平均点が60%前後に設定されていたが、大学入学共通テストは平均点を50%前後にすると大学入試センターは予告していた。その方向で問題が作成されているようだ。

国語 難易度：昨年よりやや難化 平均点108.79<大学入試センター中間集計>(昨年2021年度117・51点)

3. <出題>センター試験を踏襲した設問が多かったが、2017年、2018年に行われた試行調査のように、読解力と論理的に考える力が求められる試験であった。そして、第2問<小説>以外は2つの本文を読み、考える問題であった。予想されていた実用的文章(条文・グラフ・写真など)の出題はなかった。

4. <出題数>大問数4(昨年と同様、近代以降の文章2題、古文1題、漢文1題という構成であった。)設問数22問は昨年から変更なし。解答数は第1問で1個、第2問で1個減り、全体として2個減(38→36)。新傾向の問題の解答数は9、点数では61点だった。

5. <問題量：文字数>全体としての本文の分量は、ほぼ昨年並。

「現代文」第1問<評論>は、二つの文章をあわせて3500字程度であり、昨年の本文と【ノート3】で取りあげられた文章をあわせて3900字程度と比較してやや減少。

第2問「小説」は、本文分量が約3200字で昨年より減少している。

題3問「古文」昨年は944字であったが、今回は1148字で昨年より204字増えた。

第4問「漢文」【序文】149字、【詩】56字、合計205字であり、昨年より29字増加。

6. <大問別分析>

第1問「近代以降の文章：評論」(50点・難易度：標準)檜垣立哉『食べることの哲学』／藤原辰史『食べるとはどういうことか』

「食べる」ことについての論理的な文章2つを組み合わせた出題。主たる文章とノート・資料文という形だった昨年に比べ、複数テキスト性はより強まっている。問1の漢字の設問は、(i)と(ii)に分かれ、**(i)は従来どおりの出題、(ii)は傍線部の漢字と異なる意味を持つものを選ぶ、これまででない新傾向の設問であった。ただし、(i)と同様の漢字の基本的な知識があれば十分に対応できたと思われる。問2～問4は通常のセンター試験型の読解設問、問5は表現に関する設問。問6は、二つの文章を読んだ生徒のメモの空欄を補う新傾向の問題。(i)では二つの文章の違いが問われ、(ii)では生徒の考えのまとめが問われている。センタ**

一試験踏襲色の濃かった昨年に比べ、共通テストらしさのより強まった出題だと言える。

第2問「近代以降の文章：小説」(50点・標準) 黒井千次「庭の男」

出典は昨年の大正時代の作品と異なり、戦後の内向の世代を代表する作家黒井千次の作品。隣家の立看板に思い悩む主人公の姿が描かれている。本文の分量は減少。設問数と解答数は1ずつ減だが、枝問が多く応用的思考を試す設問もあり、解答にはやや手間がかかる。**例年、出題されている語彙の意味を問う設問がなくなったが、問1から問4は、主人公の心情を問う従来のセンター試験型の設問を踏襲している。問5では生徒のノートという体裁をとり、本文中の語句に関わる国語辞典の記述や歳時記中の俳句を引いたうえで、本文の内容と関連させて考える応用的思考の共通テストの特徴的な問題が出題された。**

第3問「古文」(50点・難)『増鏡』／二条『とはずがたり』

文章Ⅰは鎌倉時代を対象とした歴史物語の『増鏡』、文章Ⅱは、後深草院に親しく仕えた女房である二条による日記『とはずがたり』であった。読解は先に読むことになる『増鏡』のほうがやや難しく感じられるが、「注」や『とはずがたり』を参考にして読むと理解できる。本文の内容は、後深草院が異母妹の前斎宮に恋慕する場面を描いたもので、文章Ⅰが文章Ⅱを資料にして書かれたことを前提に、その2つの文章の表現や内容の特徴・差異について、歴史物語や日記といった作品のジャンルの違いも含め考える問題になっている。歴史物語の出題は2年連続。本文の分量は昨年とほぼ変わらない。

問1は、短い語句の解釈問題で、どれも基本的な古語や敬語、文法の解釈が問われている。問2の語句や表現に関する設問、問3の院の言動についての説明は従来のセンター試験型の設問を踏襲している出題形式だった。

問4の教師と生徒との話し合いの形で、3か所の空欄を補う問題。それぞれ選択肢が5つではなく4つであった。歴史物語と日記の表現の違いに注目させる設問は、目新しいものであった。2つの文章をよく読み比べて、人物関係と心情を読み取ることが求められた。この問4が共通テストの傾向を表している。

第4問「漢文」(50点・やや難) 漢文：『鞞(けん) 経室集』阮元

漢詩とその序文(文章)の組合せによる出題。「庭園に飛来した蝶」が主題であった。漢詩の出題は2020年度センター本試以来3年連続である。詩と文章の組合せという点で、共通テストの新傾向である複数テキストによる出題と言えるが、文章の内容が主に問われた。

問1から問5は、詩、語句、句法の基礎知識の設問であった。問1は語の意味の問題であったが、(ア)(イ)は基本的な語彙力が問われており、(ウ)は文脈を踏まえて「得」の意味を考える必要があった。問2は返り点の付け方と書き下し文の設問であったが、「有～者」の表現に注意して文の構造を正しくとらえる必要がある。問3の解釈の設問と、問5の読み方の設問は、仮定形、再読文字、疑問詞の用法を踏まえる必要がある。問4は押韻の問題があり、漢詩の形式名の問題も久々に出題された。問6と問7は、詩と序文の両方の内容を検討させる設問が設けられ、「複数の題材による問題」「多面的・多角的な視点」という共通テストの出題方針に沿っている。詩がやや難しいが、序文の内容を把握すれば理解できただろう。

①75回生のみなさんが来年の1月14日(土)1月15日(日)に受験する大学入学共通テストでは、複数素材(文章・条文・グラフ・表・図・写真・会話など)の出題が想定されています。複数の素材を読解して設問を解くわけですから、時間制約の厳しい試験になるかもしれません。

共通テスト3期生のみなさんが解くのは、今までとは異なる素材が組み合わせられた問題の可能性もあります。素材の組み合わせが変われば、印象は違ったものになるかもしれません。また、大学入試共通テストは平均点が50%前後になるように、問題を作成すると大学入試センターは予告しています。今年度は昨年度より難化し平均点は下がりましたが、来年度はより難化する可能性があります。試験本番でどのようなタイプの問題にも対応できるよう、できるだけ多くの問題演習に取り組んでください。

②古文・漢文の「土台となる知識」と音読

しかし、複数素材の問題に慣れることよりも、もっと重要なことがあります。それは、「国語学習の基本である読解力をつけること」です。

どんな出題であっても、「書かれている内容を理解し、設問要求に合致する選択肢を選ぶ。」という国語の読解の基本姿勢は変わりません。特に、古文・漢文の読解においては、身につけなければならない「土台となる知識」(古文単語・文法、漢文重要漢字・句法)があります。できるだけ早く、この「土台となる知識」をマスターしてください。

ただ、古文・漢文は「土台となる知識」を身に付けても、読めないことがあります。古文・漢文は本文に「誰が」に当たる主語が、省略されていることが多くあります。古文・漢文を読み慣れていないと、この省略された主語を理解することができません。古文・漢文に慣れるためには、毎日5分は「誰が」「何をしたかを」考えながら音読するのが効果的です。音読をして古文・漢文に慣れれば、省略されている主語が理解できるようになります。

③センター試験レベルの設問を解く力を身に付けよう。

過去のセンター試験の問題は良質なものが多く、最良の演習素材です。基本的な読解力を身につけたら、センター試験の過去問で読解力を鍛えることも良い訓練になります。

過去2回の大学入学共通テストの国語の設問の70%前後はセンター試験の設問を踏襲しています。本年は、新傾向の問題の解答数は9(全体では36)点数では61点(200点)だった。新傾向の設問に対応することも大事ですが、センター試験レベルの設問を解く力を身に付けることは必須です。これは私立大学入試への対策ともなります。

④設問別の対策法

第1問は「論理的な文章」「実用的な文章」です。まず、やらねばならないことは漢字・語彙の基礎固めです。漢字力・語彙力は、単に漢字問題や語彙問題で点を取ることにとどまらず、読解力を根本から支えるものになります。毎日10分は書き取りの練習をしてください。漢字は訓読みを、熟語は意味をしっかりと覚えてください。また、現代文の教科書の附録に「評論文を読むときに理解していないといけない語の一覧」があります。是非、活用してください。

第1問の「論理的な文章」「実用的な文章」は、これらの文章を組み合わせられた複数素材で出題される見込みです。抽象度が高く、論理力思考力が問われたセンター試験の過去問も利用しながら読解力・論理的思考力を鍛え、問題集や共通テスト型問題の模擬試験を活用して複数素材の問題への対応力を高めてください。

本文に複数素材がある場合、それらをどの程度読み込む必要があるかなど(例えば、長い法律の条文があるが、設問からすると一部のポイントだけを理解すればよいなど)の判断も重要になってきます。そして、

本文を読み進めるときはただ目で文字を追うのではなく、キーワードや筆者の主張に線を引く、関連資料のポイントに印をつけておくなど、手を動かすことで解答の根拠をすばやく見つけられるように学習を進めてください。

第2問は、「文学的な文章」からの出題となります。 試行調査の第1回では、小説とそれを元にした小説の組み合わせの問題、第2回では、詩とエッセイの組み合わせ問題が出題され、昨年の共通テストでは、小説と、その小説に関する批評文（設問中）を含んだ問題が出題されました。

そして今回の共通テストでは小説中の語句を歳時記や関連する俳句などと結び付け、より深い理解へと誘導する問題が出題されました。このように、「文学的な文章」においても複数素材の組み合わせでの出題が想定されます。

小説は感情移入をして読むのが基本ですが、問題を解くには本文を客観的かつ正確に読み、事実関係と登場人物の心情をとらえ、選択肢を要素ごとに分けて丁寧に吟味する読解法を身につける必要があります。

語句問題は「辞書的な意味」を答える必要があります。日頃から辞書を引く習慣をつけて語彙力を強化してください。(本年は語句の意味を問う設問がありませんでしたが、例年は出題されているので要注意です。)

また、試行調査で出題されていた韻文の問題に備えて「国語便覧」などで韻文（詩・短歌・俳句など）の説明の箇所を読んでください。なお、小説だけでなく、文学評論が出題される可能性もあります。その場合は、論理的な文章の読解の仕方をベースに解いてください。

第3問「古文」・第4問「漢文」

大学入学共通テストの古文・漢文の問題は、現代文に比べるとセンター試験との違いは少ないようです。問題演習にセンター試験の過去問を積極的に利用してください。

古文や漢文は知識・基本事項の比重が大きく、身につけた知識が点数に結び付きやすい科目です。古文であれば、古典文法・古文単語・古典常識・敬語法を、漢文であれば、返り点・句法・漢字の用法や読みなど、「土台となる知識」の完成度が大きなカギを握ります。これらをできるだけ早い時期にマスターすることが大切です。

漢文は共通テストでしか必要でない人が多く、あまり熱心に勉強しない人がいますが、漢文は書き下し文に直せば、易しい古文になります。また、現代の日本語の文章は、漢文の書き下し文が基になっています。このことを意識して、漢文の勉強をすると古文、現代文の実力がアップします。

⑤問題演習と模試の活用

「土台となる知識」を身につけた後は、それを駆使してできるだけたくさんの問題を解き、解法の訓練を重ねることが必要です。「土台となる知識」の上に、正解を判断するスピードや要領の訓練を重ねることで、常に高得点をとる力を身に付けることができますようになります。また、古文・漢文の問題を解くときには、前述のように「誰が」「何をしたかを」考えながら音読をしてください。

国語の授業では問題集を用いた演習も行います。前述の古文・漢文の「土台となる知識」をできるだけ早くマスターするように学習してください。

実際の試験の時に高得点を取るためには、解法と時間配分の訓練を繰り返す必要があります。複数素材を扱った共通テスト対応型の模試は実戦演習に最適です。模試は、学習の進捗度・定着度を測定・認識するという意味で大変重要です。3年生では「模試」を受験していくことで、着実に実力を伸ばしてください。